

# 東南アジア史学会会報 No. 34

昭和 56 年 4 月

## 東南アジア史学会第 24 回秋季研究大会報告

東南アジア史学会第 24 回秋季研究大会は昭和 55 年 10 月 18 日(土)・19 日(日)の両日、鹿児島大学において開催され、70 余名が参加し新入会員も数名迎えるという大盛況でした。また 20 日(月)・21 日(火)の坊ノ津シンポジウムの際には町あげての大歓迎を受け、有意義な交流を持つことができました。大会・坊ノ津シンポジウムの報告要旨は以下の通りです。

### 上ビルマの村落の構造と秩序

田 村 克 己

発表者は、1978 年 3 月より 1 年間、国際交流基金の派遣により、ビルマにて現地調査を行った。この間およそ 10 ヶ月にわたり、上ビルマの一村落で住み込み調査を行った。調査村落は、マンダレーの西 30 km 余に位置し、200 戸・1000 人余、米作・畑作混合の純農村で、仏教徒のビルマ人村落である。当発表は、現地調査で得られた資料や経験を基に、村落社会の構造や秩序をもたらす諸原理の幾つかを抽出しようとする試みである。

空間的に一軒の家(時に敷地・柵)を占める世帯は、単に一つの社会的・経済的単位として存在するわけではない。例えば、結婚にあたって男側の親から土地や牛等の分与を受けた若夫婦も、結婚後暫くはいづれかの親の家に同居することが多く、この間、一軒の家に 2 つの土地経営単位があつて「共同耕作」的に経営される。また養子や手伝い同居人の存在等は、世帯と家族の不一致や、世帯及び家族成員の境界の曖昧さをもたらす。親族についても自律的集団が形成されるわけではない。親族が集まって仏教儀礼等が共同で行われることがあるが、負うのは個人中心の緩やかなサークルであり、姻戚や友人も含まれる。そして別の機会にはサークル内の別の人人が中心となるように、親族は個人中心の曖昧な範疇にとどまる。村人の経済的・政治的・儀礼的な関係は自村を越えて広がっており、村が有機的で共同体的な様相を示すわけではない。

しかしながら、村落内部において、一定の完結した社会生活が秩序をもって営まれる。それをもたらすものとして第一に考えられるのは、男性を優位におく性と年齢による差異である。それは日常生活の様々な局面において示され、年長男子で *Lugyi* と呼ばれる人は、或る程度に村秩序の体现者として在る。また村内に儀礼共同組織が存在するが、それを支えるのは互酬性の原理である。同様のことは、村落内の特徴的な人間関係である個人的二者関係にもあてはまる。この関係は「親しい(khin)」と言い表され、他者に対する行為の理由であり、行為によって確認・強化される。最後に仏教が社会生活に及ぼす影響も考えねばならない。村人にとって布施等の儀礼を行うことは功德を積むことを目的とするものであるが、効果が現世的でないために、外形的なものでそれを測ろうとする傾向を持つ。それは、威信の増大とも結びついて、規模の大きさを求めて行く。このことは、儀礼の限定された場面ながら、一定範囲の人々を組織化して行く結果を伴っている。

## 14～17世紀中央ビルマのミョウ（城市）経済

伊 東 利 勝

パガン朝滅亡後、地方行政の単位となったミョウを支配するミョウ・ザー（領主）のある者は、自らを王と僭称し、中央政権に対ししばしば叛旗をひるがえした。この傾向は、15～16世紀、中央平原地帯南部のミョウに顕著に認められる。

これらミョウの経済基盤は農業であった。大溜池による灌漑田を中心に、その外側に天水田、畠地及び荒蕪地が展開し、稻、モロコシ、ゴマ、豆類、棉花などが栽培されていた。棉作はWagyi種を中心Pyuの時代から行なわれていたが、現在一般的となっているWagale種の栽培は、中央平原地帯の開発、つまりミョウの生成とともにはじめられたと考えられる。そしてこれは、ミョウ経済の発展要因となる。つまり、棉の生理生態は、稻・ゴマ・モロコシ等と逆の関係にあるので、この栽培は未利用地（荒蕪地）の耕地化、天水作の危険分散、入口圧の吸収等の意義を有す。耕作法は既存の畠作技術の単なる延長にすぎず、特別の投資を必要としない。

ところで、領主は、自己の勢力増大を図るため、特に中心部において灌漑施設の開発を推進したが、拓かれた農地は技術的自然的要因に規定され、ごく限られたものにすぎなかった。一方周辺部では、個別農民による開墾が行なわれていた。これらの農民は、それまでのKywan（隸民）階層にかわりAthi階層として把握されつつ、領主の支配体系に組み込まれていった。基本的にはこの階層が、ミョウ経済の担い手であり、その形成・発展を支えた農業の一部門が棉作であった。

綿布は、ピンヤ・インワ時代には自給自足的生産の域を脱し、国内市場向けに商品化しており、かつ対中国貿易の主要な商品となっていた。領主は、こうした状況のもとで対内的には綿布税、織布税という名目で、対外的にはシャン族などを経由する対中国貿易（「塩綿貿易」）によって大きな利益を得ていたと考えられる（特にTaungdwingyi, Yameithinなど）。つまり棉作は、限界地農業の展開とそれによるAthi階層の形成、及び領主経済の発展に大きく寄与し、「領主制」成立のテコとなったと言えよう。

ところが、江南の松江地方に木綿織物業が発達し、中国側の需要は綿布から緜綿に変化する。さらに、後者の買付、輸出が華僑の手によって行なわれるに及び、綿布の生産過程や輸出から大きな利益を引き出していた領主経済はその有利性を失うことになる。ニャウンヤン王朝が、中央集権的組織化を貫徹できた所以である。

## ビルマ・雲南ルートの史的展開 — 唐代を中心に —

藤 沢 義 美

唐代中国側からの入雲路は、①建昌路（寧遠路）、②南溪路（戎州路）、③黔州路（貴州路）、④歩頭路（安南路）の4コースがあり、これらの路程については蛮書卷1雲南海内程途や新唐書卷42地理志などに説明記事がある。（新唐書卷43の賈耽道里記には①コースから上ビルマへのコースについての記事がある。）

唐代におけるビルマ・雲南ルートの開発や利用状況については、唐代前半期は唐朝雲南経営の動向から、唐代後半期は唐・南詔交渉史や驃・南詔交渉史の関係史料から断片的にかいまみるのみで、具体

## 14～17世紀中央ビルマのミョウ（城市）経済

伊 東 利 勝

パガン朝滅亡後、地方行政の単位となつたミョウを支配するミョウ・ザー（領主）のある者は、自らを王と僭称し、中央政権に対ししばしば叛旗をひるがえした。この傾向は、15～16世紀、中央平原地帯南部のミョウに顕著に認められる。

これらミョウの経済基盤は農業であった。大溜池による灌漑田を中心に、その外側に天水田、畠地及び荒蕪地が展開し、稻、モロコシ、ゴマ、豆類、棉花などが栽培されていた。棉作はWagyi種を中心Pyuの時代から行なわれていたが、現在一般的となっているWagale種の栽培は、中央平原地帯の開発、つまりミョウの生成とともにはじまったと考えられる。そしてこれは、ミョウ経済の発展要因となる。つまり、棉の生理生態は、稻・ゴマ・モロコシ等と逆の関係にあるので、この栽培は未利用地（荒蕪地）の耕地化、天水作の危険分散、入口圧の吸収等の意義を有す。耕作法は既存の畠作技術の単なる延長にすぎず、特別の投資を必要としない。

ところで、領主は、自己の勢力増大を図るため、特に中心部において灌漑施設の開発を推進したが、拓かれた農地は技術的自然的要因に規定され、ごく限られたものにすぎなかつた。一方周辺部では、個別農民による開墾が行なわれていた。これらの農民は、それまでのKywan（隸民）階層にかわりAthi階層として把握されつつ、領主の支配体系に組み込まれていった。基本的にはこの階層が、ミョウ経済の担い手であり、その形成・発展を支えた農業の一部門が棉作であった。

綿布は、ピンヤ・インワ時代には自給自足的生産の域を脱し、国内市場向けに商品化しており、かつ対中国貿易の主要な商品となっていた。領主は、こうした状況のもとで対内的には綿布税、織布税という名目で、対外的にはシャン族などを経由する対中国貿易（「塩綿貿易」）によって大きな利益を得ていたと考えられる（特にTaungdwingyi, Yameithinなど）。つまり棉作は、限界地農業の展開とそれによるAthi階層の形成、及び領主経済の発展に大きく寄与し、「領主制」成立のテコとなつたと言えよう。

ところが、江南の松江地方に木綿織物業が発達し、中国側の需要は綿布から緜綿に変化する。さらに、後者の買付、輸出が華僑の手によって行なわれるに及び、綿布の生産過程や輸出から大きな利益を引き出していた領主経済はその有利性を失うことになる。ニャウンヤン王朝が、中央集権的組織化を貫徹できた所以である。

## ビルマ・雲南ルートの史的展開 — 唐代を中心に —

藤 沢 義 美

唐代中国側からの入雲路は、①建昌路（寧遠路）、②南溪路（戎州路）、③黔州路（貴州路）、④歩頭路（安南路）の4コースがあり、これらの路程については蛮書卷1雲南海内程途や新唐書卷42地理志などに説明記事がある。（新唐書卷43の賈耽道里記には①コースから上ビルマへのコースについての記事がある。）

唐代におけるビルマ・雲南ルートの開発や利用状況については、唐代前半期は唐朝雲南経営の動向から、唐代後半期は唐・南詔交渉史や驃・南詔交渉史の関係史料から断片的にかいまみるのみで、具体

的な状況は分らない。

唐朝は初唐より⑧コース沿いに雲南経営を推進し、成都府からは④より⑧（西昌より東川へ）コースを経て入雲したが、貞觀末に至って、雋州都督劉伯英が④コースを開発して「西洱河・天竺道」を打通すべきことを上疏したのである。梁建方（648），趙高祖（651）の大征討が行なわれた結果、④コース（成都府より大理盆地への最短ルート）が全通し、姚州（姚安県附近）に都督府が設置されて、本格的な大理盆地経営に着手したが、やがて唐と吐蕃の和が破れ（671），以後吐蕃勢力の進出によって、武后代を通じ雲南経営は後退した。

玄宗代に至り、劍南節度使が雲南経営を担当するようになると、これまで、大理盆地から上ビルマ（いわゆる「ビルマ・雲南ルート」の開発）を志向していた経営動向が一変して、⑩コースの歩頭路開発に狂奔し、雲南諸部族の反感を買い、その結果、南詔部族が興起し、安史の乱と相まって雲南経営は頓挫したのである。こうした歩頭路開発強行の史的事情については今後の課題であるが、これは成都府からのビルマ・雲南ルート開発のルート変更であり、当時アラビア商人が来航していた交州に通じる意図があったのではないかともみなされるのであって、その史的背景に楊国忠や劍南節度使（とくに鮮于仲通）および四川商人の動向が浮び上ってくるのである。

唐代後半期を通じ雲南地方に王国を形成した南詔国は、上ビルマ地方をも支配し、驃国とも交渉関係のあったことが知られるが、ビルマ・雲南ルートの交通事情や交易状況などを具体的に物語る史料はほとんど見当らない。

## 農耕文化史からみた東南アジア

中尾佐助

世界各地に存在する農耕文化基本複合の類型を設定し、かつその歴史的展開を研究することは可能である。その分析にあたって、栽培植物、利用植物を手がかりとすることは、文化の伝播と独立発生との区別が、他の文化要素より正確にできる。また農耕文化基本複合の地理的分布圏の大きさは、他の文化要素、例えば土器の諸型式、言語などの分布圏より常に広大であるので、文化類型を巨視的に捕捉するのに適している。しかしこの分析法では諸農耕文化複合の歴史的層位の推定はできるが、その実年代の推定は困難であるので、そのためには考古学などの成果を参照しなければならない。

東南アジアの第一期の農耕文化は根栽農耕文化で、中国南部、マレー附近から南太平洋に伝播した。その初期はヤム、タロー、バナナなどを半栽培し、土器はあったが織機はなかった。この農耕文化は日本にも縄文時代に到着し、共通の利用植物にサトイモ、ヤマノイモ類、カジノキなどがある。土器は南太平洋では殆んど消失したが、日本では大発達した。

東南アジアの第二期の農耕文化は雑穀焼畑によるもので、その家屋は土間型式であったであろう。台湾の高砂族、ハルマヘラ島などがかなり純粹の形で残っている。

第三期の農耕文化は水田稲作で杭上家屋、穂刈り、高床倉庫が原型で、歌垣、粒酒を持った文化と考えられ、これにパディ農耕文化と命名した。タイ、ビルマ、フィリピン、インドネシアの殆んどはこの文化圏である。日本の弥生文化はこのパディ農耕文化と殆んど同一の農耕文化であり、その年代もあまりへだてたものではないだろう。この農耕文化の上に最初の国家形成が日本でも東南アジアでも紀元後数百年の時期におこなわれた。

的な状況は分らない。

唐朝は初唐より⑧コース沿いに雲南経営を推進し、成都府からは④より⑧（西昌より東川へ）コースを経て入雲したが、貞觀末に至って、雋州都督劉伯英が④コースを開発して「西洱河・天竺道」を打通すべきことを上疏したのである。梁建方（648），趙高祖（651）の大征討が行なわれた結果、④コース（成都府より大理盆地への最短ルート）が全通し、姚州（姚安県附近）に都督府が設置されて、本格的な大理盆地経営に着手したが、やがて唐と吐蕃の和が破れ（671），以後吐蕃勢力の進出によって、武后代を通じ雲南経営は後退した。

玄宗代に至り、劍南節度使が雲南経営を担当するようになると、これまで、大理盆地から上ビルマ（いわゆる「ビルマ・雲南ルート」の開発）を志向していた経営動向が一変して、⑩コースの歩頭路開発に狂奔し、雲南諸部族の反感を買い、その結果、南詔部族が興起し、安史の乱と相まって雲南経営は頓挫したのである。こうした歩頭路開発強行の史的事情については今後の課題であるが、これは成都府からのビルマ・雲南ルート開発のルート変更であり、当時アラビア商人が来航していた交州に通じる意図があったのではないかともみなされるのであって、その史的背景に楊国忠や劍南節度使（とくに鮮于仲通）および四川商人の動向が浮び上ってくるのである。

唐代後半期を通じ雲南地方に王国を形成した南詔国は、上ビルマ地方をも支配し、驃国とも交渉関係のあったことが知られるが、ビルマ・雲南ルートの交通事情や交易状況などを具体的に物語る史料はほとんど見当らない。

## 農耕文化史からみた東南アジア

中尾佐助

世界各地に存在する農耕文化基本複合の類型を設定し、かつその歴史的展開を研究することは可能である。その分析にあたって、栽培植物、利用植物を手がかりとすることは、文化の伝播と独立発生との区別が、他の文化要素より正確にできる。また農耕文化基本複合の地理的分布圏の大きさは、他の文化要素、例えば土器の諸型式、言語などの分布圏より常に広大であるので、文化類型を巨視的に捕捉するのに適している。しかしこの分析法では諸農耕文化複合の歴史的層位の推定はできるが、その実年代の推定は困難であるので、そのためには考古学などの成果を参照しなければならない。

東南アジアの第一期の農耕文化は根栽農耕文化で、中国南部、マレー附近から南太平洋に伝播した。その初期はヤム、タロー、バナナなどを半栽培し、土器はあったが織機はなかった。この農耕文化は日本にも縄文時代に到着し、共通の利用植物にサトイモ、ヤマノイモ類、カジノキなどがある。土器は南太平洋では殆んど消失したが、日本では大発達した。

東南アジアの第二期の農耕文化は雑穀焼畑によるもので、その家屋は土間型式であったであろう。台湾の高砂族、ハルマヘラ島などがかなり純粹の形で残っている。

第三期の農耕文化は水田稲作で杭上家屋、穂刈り、高床倉庫が原型で、歌垣、粒酒を持った文化と考えられ、これにパディ農耕文化と命名した。タイ、ビルマ、フィリピン、インドネシアの殆んどはこの文化圏である。日本の弥生文化はこのパディ農耕文化と殆んど同一の農耕文化であり、その年代もあまりへだてたものではないだろう。この農耕文化の上に最初の国家形成が日本でも東南アジアでも紀元後数百年の時期におこなわれた。

## 伝統的帆船と海区

田口一夫

本論では、6・7世紀以降の外洋型帆船が遠距離航海をする場合について、i) 船体構造・帆装、ii) 航海環境、iii) 航海技術の面から基本的条件を考察した。航行区域は東シナ海および南シナ海を主として考え、北部インド洋を含む周辺海域についても論及した。これら海域の大きい特徴は、季節風が卓越し、珊瑚礁が点在し、時とすると陸上目標もないことである。従って、河川・内海型の船舶では航行不能といつてもよい。

すなわち冬季の北東風と夏季の南西風の連吹と、それによる吹送流（シナ海）およびウネリ（インド洋）が帆船航行の大きい障害となっている。このことは、遣唐船および中国商船の出発一到着月からも容易に証されるし、鄭和の大航海の時期も推察できよう。

こうした条件下で航海した例として中国商船の活躍が広く知られているが、これはジャンクの船体構造とその帆装が著しく秀れていたことによるものである。帆の向きを変えられるので逆風時にも航行できることが特記される。また暦の作成にみられる天文学の進歩が航海へ応用され、さらに指南車（針）としての発見が磁気コンパス（羅針儀）になったように、共に地物のない大洋航海における必須の要件であった。

当時としての、アジアの大航海時代は慣習の長期訓練と、それらを支援できる技術の存在によってこそ開花したといえる。

## 東西交渉史上における鹿児島県

永積昭

鹿児島県は日本列島の南西方に大きく張り出した地理上の位置により、古来日本有数の海上交通の要衝として知られた。遣唐使の出発港として、また鑑真和尚の到着地として、坊ノ津港の名は早くから本邦三津の一に数えられている。倭寇の活動や琉球との通交貿易はもとより、1543年ごろ初めて種子島に渡航したポルトガル船は鉄砲を伝え、また1549年に日本人ヤジロー（またはアンジロー）に導かれて薩摩に上陸したフランシスコ・ザビエルはキリスト教の福音を各地で説いた。

1600年の関ヶ原の戦いの結果、薩摩の島津氏は所領を安堵され、徳川家康から朝鮮の役で捕虜とした明人茅国科の本国送還を命じられた。藩主島津家久は坊ノ津の鳥原宗安にその役目を果させ、これが契機となって1601年に福州船2隻が来航したが、海賊に襲われて沈没し、以後官船派遣は中絶した。しかし明の私船はこれ以後も鹿児島の各港を訪れた。1610年頃の幕府命令は「唐船2隻の中1隻は長崎へ廻航せよ」と定めたが、なかなかこの方針は徹底しなかった。この時期に鹿児島県下に来航した外国船の中には、ベトナム、カンボジア、タイなどから来たものもある。またイギリスは平戸港で優遇されなかったため1615~17年にかけて薩摩藩に接触したが、22年には日本貿易から撤退した。平戸のオランダもしばしばこの地特産の樟腦を求めた。

やがて1634年になると、長崎奉行を通じて、唐船の大名領内着岸を禁止する命令が伝えられ、すべて長崎に曳航されることとなった。こうして39年の鎖国を待たずに鹿児島県は東西交通の表舞台から退くこととなつたが、沖縄等を通じての密貿易は鎖国中も続いた。

1708年に日本潜入を企て、種子島に単独上陸して捕えられたシチリア島パレルモの人、ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティはのちに新井白石との問答で有名になるが、護送の途中、暫く坊ノ津に幽閉された事実が知られている。

## 伝統的帆船と海区

田口一夫

本論では、6・7世紀以降の外洋型帆船が遠距離航海をする場合について、i) 船体構造・帆装、ii) 航海環境、iii) 航海技術の面から基本的条件を考察した。航行区域は東シナ海および南シナ海を主として考え、北部インド洋を含む周辺海域についても論及した。これら海域の大きい特徴は、季節風が卓越し、珊瑚礁が点在し、時とすると陸上目標もないことである。従って、河川・内海型の船舶では航行不能といつてもよい。

すなわち冬季の北東風と夏季の南西風の連吹と、それによる吹送流（シナ海）およびウネリ（インド洋）が帆船航行の大きい障害となっている。このことは、遣唐船および中国商船の出発一到着月からも容易に証されるし、鄭和の大航海の時期も推察できよう。

こうした条件下で航海した例として中国商船の活躍が広く知られているが、これはジャンクの船体構造とその帆装が著しく秀れていたことによるものである。帆の向きを変えられるので逆風時にも航行できることが特記される。また暦の作成にみられる天文学の進歩が航海へ応用され、さらに指南車（針）としての発見が磁気コンパス（羅針儀）になったように、共に地物のない大洋航海における必須の要件であった。

当時としての、アジアの大航海時代は慣習の長期訓練と、それらを支援できる技術の存在によってこそ開花したといえる。

## 東西交渉史上における鹿児島県

永積昭

鹿児島県は日本列島の南西方に大きく張り出した地理上の位置により、古来日本有数の海上交通の要衝として知られた。遣唐使の出発港として、また鑑真和尚の到着地として、坊ノ津港の名は早くから本邦三津の一に数えられている。倭寇の活動や琉球との通交貿易はもとより、1543年ごろ初めて種子島に渡航したポルトガル船は鉄砲を伝え、また1549年に日本人ヤジロー（またはアンジロー）に導かれて薩摩に上陸したフランシスコ・ザビエルはキリスト教の福音を各地で説いた。

1600年の関ヶ原の戦いの結果、薩摩の島津氏は所領を安堵され、徳川家康から朝鮮の役で捕虜とした明人茅国科の本国送還を命じられた。藩主島津家久は坊ノ津の鳥原宗安にその役目を果させ、これが契機となって1601年に福州船2隻が来航したが、海賊に襲われて沈没し、以後官船派遣は中絶した。しかし明の私船はこれ以後も鹿児島の各港を訪れた。1610年頃の幕府命令は「唐船2隻の中1隻は長崎へ廻航せよ」と定めたが、なかなかこの方針は徹底しなかった。この時期に鹿児島県下に来航した外国船の中には、ベトナム、カンボジア、タイなどから来たものもある。またイギリスは平戸港で優遇されなかったため1615~17年にかけて薩摩藩に接触したが、22年には日本貿易から撤退した。平戸のオランダもしばしばこの地特産の樟腦を求めた。

やがて1634年になると、長崎奉行を通じて、唐船の大名領内着岸を禁止する命令が伝えられ、すべて長崎に曳航されることとなった。こうして39年の鎖国を待たずに鹿児島県は東西交通の表舞台から退くこととなつたが、沖縄等を通じての密貿易は鎖国中も続いた。

1708年に日本潜入を企て、種子島に単独上陸して捕えられたシチリア島パレルモの人、ジョヴァンニ・バッティスタ・シドッティはのちに新井白石との問答で有名になるが、護送の途中、暫く坊ノ津に幽閉された事実が知られている。

## 昭和 56 年度研究大会について

昭和 56 年度春季研究大会は、6月 6 日（土）御車会館、7日（日）京大会館に於いて開催されました。6日は自由発表、7日は 20 回大会（昭和 53 年 12 月 天理大学）でのテーマ「植民地支配と東南アジアの経済的・社会的変容（19世紀を中心にして）」の延長線上で、「植民地支配と東南アジアの政治的・思想的変容（20世紀前半を中心にして）」というテーマでのシンポジウムを予定しており、大会委員を中心に準備を進めております。報告を希望される会員は、4月末までに事務局までお知らせ下さい。

秋季大会は東京開催を予定しておりますが、日時は未定です。

## 昭和 55 年度会計報告

（昭和 55. 1. 1～昭和 55. 12. 31）

会計 桜井 由躬雄

諸物価高騰と事業拡張のためながらく低迷をつづけておりました学会会計も、本年度 6 月 7 日の総会における会費改定及び、『著作論文目録』の急速な売上拡大、また諸先生方の多額の御寄付により、危機を突破して、下記の通り多額の次年度繰越金を計上するにいたりました。御協力を心より感謝いたします。

### I 収入の部

前年度より繰越	61,643 円
会 費 収 入	245,000 円
『著作論文目録』売上金	88,360 円
55 年度春期研究大会参加費	32,000 円
同 秋期研究大会参加費	22,500 円
寄 付	150,000 円

### II 支出の部

事 務 諸 経 費	14,625 円
郵 送 費	72,360 円
印 刷 費	55,700 円
55 年度春期研究大会大会費	78,850 円
同 秋期研究大会大会費	69,160 円
支 出 総 計	290,695 円
次 年 度 繰 越 金	308,808 円
	599,503 円

会計簿を点検し、間違いないことを確認しました。

昭和 55 年 12 月 31 日

会計監査 中村孝志 ㊞

## 新委員の委嘱

昭和 56 年 3 月より土屋健治氏に委員を委嘱いたしました。（藤原利一郎）

# 東南アジア—歴史と文化—

No. 10, 1981. 4.

## 目 次

### 〔論 文〕

- 清ビルマ関係—戦争と和平—1766～1790年 鈴木中正  
Śailendra王朝とBorobudur 岩本裕  
「大東亜共栄圏」とインドシナ—食糧獲得のための戦略 田淵幸親  
動員と統制—日本軍政期のジャワにおけるイスラム宣撫工作 倉沢愛子

### 〔研究ノート〕

- 麓川蛮百夷の叛乱について—明初平滇工作の諸相と土着対応— 喜田幹生  
中央スラウェシ・トラジャ地方の社会変容と宗教—19世紀末から20世紀 弘末雅士  
初めにかけての東トラジャ族の事例を中心として—

### 〔書評・紹介〕

- M.C. Subhadradis Diskul : The Art of Śrīvijaya 伊東照司  
Robustiano Echaz' : Sketches of the Island of Negros 永野善子  
Anthony Reid & David Marr : Perceptions of the Past in Southeast Asia 永積昭  
田淵幸親氏論文『日本の対インドシナ「植民地化」プランとその実態』についての若干のコメント 岩武照彦

### 〔モンスーン=学界消息〕

- 第8回 I.A.H.A. 大会報告 (I) 市川健二郎  
第8回 I.A.H.A. 大会報告 (II) 永積昭  
国際シンポジウム：「ボロブドールの宗教美術とその保存」開催報告 千原大五郎  
国際漢学会議に出席して 白鳥芳郎

- 
- 東南アジア関係文献目録 (1979年1月～12月) 伊東照司  
和田正彦
- 

- 東南アジア史学会会則 東南アジア史学会入会の方法  
『東南アジア』執筆要領

❀ ❀ ❀ ❀

昭和 56 年 4 月 発行	
発行者	東南アジア史学会（藤原利一郎）
住 所	〒606 京都市左京区吉田本町 京都大学文学部東洋史研究室
電 話	(075)751-2111 内線 2790
振 替	京都 41772 東南アジア史学会